



## 端午の節句

黒板伸夫

さわやかなさつき空に泳ぐ「鯉のぼり」。デパートの売場にぎっしりと並んだ「武者人形」。季節感のうすらいだ東京でも、これらの風物が端午（たんご）の節句のきたことを思いおこさせます。

戦後「こどもの日」と定められた端午の節句は、昔から男子の節句として、女の子の三月三日の桃の節句とならんで祝われました。それはまた「武」の節句という性格をもっていました。が、武者人形をかざる風習は、非常に古い起原をもつこの節句の歴史のなかでは案外にあたらしく、せいぜい江戸時代にはいつてからのこと、またこの日のシンボルのような鯉のぼりの歴史もやはりみじかいです。

ここで端午の節句の歴史をふりかえってみるのも無意味ではないでしょう。もちろん長い時代の変遷だけでなく、各地方の

独特の行事、宮廷や民間のちがいはなど、とても限られた紙面や、私のとばしい知識では、そのごく一端をのべることしかできません。

「端午」という言葉については、端とは「はじめ」ということで、もとは月の第一の午（うま）の日に行なわれたものともいい、また最初の「五」の日を意味するので、「端五」が正しいのだともいわれます。また「五」が重なるので、「重五（ちようご）」ともいったそうです。一月一日の元日、三月三日の上巳（じようし）、七月七日の七夕（しちせき）。たなばた祭、九月九日の重陽（ちようよう）。菊の節句）などとともに、奇数月で同数字の重なる日が、古くからの節句として行事が行なわれていたのです。

これらの年中行事はいずれも中国からきたもので、それが日

本の風習と結びついたものですが、この端午も中国では悪鬼や病気をはらう祭であったようです。

日本では古く推古天皇のころから、五月五日「くすりがり」といって、官廷人たちが、狩猟（しゅりょう）の時と同じいでたちで、山野で大がかりに葉草類をとるもよおしがあったことが、日本書紀や万葉集にみえています。そして奈良、平安時代には、朝廷の節会（せちえ）として儀式や宴会などの行事が行なわれるようになりました。

さて、このころからの主役の一つは菖蒲（しょうぶ）です。「あやめ」ともよまれていました。病や邪気をはらうものとして、儀式のときには、朝廷から群臣に菖蒲をたまひ、またどういふ形のものかよくわかりませんが、天皇はじめ参列者が「菖蒲のかずら」を身につけました。

そして菖蒲でかざった輿（こし）をつくったり、屋根にふいたりしました。後世では屋根に菖蒲のほか、蓬（よもぎ）を一緒にふいたこともありました。

また葉玉（くすだま）というものが用いられました。これは彩色した糸でつくり、香りをつけた厄よけの飾りもので、身につけたり、家に飾ったりしたものでしたが、これもはじめの形は、菖蒲や蓬などを中心に、季節の花などを飾り、糸糸で結ん

だものだったようです。中国でこの日に五色の紐を腕にかけ、病をはらった風習と関係があるのでしよう。そして、菖蒲、蓬などは、葉草としての効用から、さらに靈力をもつ草と考えられたのだと思われれます。

なお「くすだま」は、もともとは「葉の玉」ではなく、「不思議な靈力をもつ玉」の意味だったという説もあります。

枕草子や栄花物語など、平安時代の文学には、貴族たちの邸の菖蒲や葉玉の飾りもの、菖蒲を髪にさした女の人たち、歌などよみかわして遊ぶ風景などが美しく描写され、読む人の季節感をそそります。

しかし五月は現在の太陽暦では春のさかりですが、太陰暦（旧暦）では夏ですから、季節感といっても現在とはずいぶんちがいます。そして衛生的でなかった昔では、夏は疫病をおそれなければならぬ時候だったので、この節句に病よけ、厄よけの意味が強かったのでしょう。

菖蒲は飾りもののほか、菖蒲酒など、後世までいろいろな形でこの節句に用いられましたが、その一つの菖蒲湯は、現在でもたてるお宅も多いと思います。

この節会（せちえ）は奈良、平安時代からすでに「武」の行事としての性格ももっていました。さきにのべた「くすりがり」

なども葉草をとる風習と、「武」を練る狩が結びついたものといえるでしょう。五月五日を含めての数日、近衛府（このえふ）、兵衛府（ひようえふ）の武官たちが騎射をきそい合いました。後には近衛府だけになりましたが、これを手結（てつがい）といひます。

このように「武」に関係ある性格からか、この日に民間でも子どもたちの石合戦が行なわれるようになりました。徳川家康が幼時に石合戦をみて、人数のすくない方の勝利を予言したという話は有名です。

江戸時代には石合戦は行なわれなくなりましたが、その名残りでこの日に、作りもののかぶとや刀、旗さし物をもって「いくさごっこ」をする風習となったといわれます。

武家の時代となるにしたがって、この「武」の要素が強くうち出されてくるようになりました。男の子の節句としての性格も強くなり、男の子の生まれたときの初節句はことに祝われませんが、このならわしは今でもかわらないようです。

近世では、旗、のぼり、かぶと、刀などに菖蒲をかざって、家の前に立てる風習も出てきましたが、だんだんに金をかけて手の込んだ作りものや、大きな人形をならべるようになりまし

た。端午の節句と人形の関係は古く、もとは中国の風習で、蓬の葉などでつくった人形を戸口にかけて厄よけのまじないにしたので、日本でもすでに平安時代に行なわれ、後世まで伝わったことが分かります。

鎌倉時代には紙のかぶとや人形を飾ったりする風習がすでにみられますが、この人形はかぶと人形とよばれ、もともとはかぶとに付けたものだったが、やがて別々になったといわれ、かぶと人形の名はずっと後世まで残ります。

江戸時代の中ごろ以後には、作りもののかぶと、刀（菖蒲かぶと、菖蒲刀とよばれました）、旗、のぼりなどを売り歩いたり、店売りしたようすが多くの書物にみられますが、その中にかぶと人形もあります。そして鯉のぼりもようやく登場しますが、はじめは小さな紙製の吹流しだったようです。今のような立派な鯉のぼりがいつごろからはじまったのか私にはちょっと分かりません。

江戸時代には、かぶと、刀、その他武器の作り物の方が人形より主役だったようですが、これらはかなり立派なものがあつたので、たびたび幕府で出した儉約令の時には、よくやりだまにあげられています。

もう一つこの日に忘れられないものとして「鍾旭」（しょうき）

があります。中国の古い伝説にある鬼神ですが、唐の時代に官吏登用試験に落第して自殺した鍾旭という人物が、その時に帝が同情して手厚く葬った恩義に感じて、帝を守護して邪鬼を退治する鬼神になったということです。中国でも日本でも鍾旭の画像が厄よけに用いられましたが、端午の節句に結びついたのはいつごろかはつきり分かりません。

こうして、いまの端午の節句の形は、ほぼ江戸時代に来上がつたといつてよいでしょう。

端午の節句のたべものとしては、「ちまき」と「柏餅」がありますが、これは「ちまき」が断然古いのです。もともと現在都會で売られているものとは非常にちがひ、また時代によつてうつりかわりがあったようです。

これは、起原はやはり中国で、水中の悪神のたたりをしずめるのに用いたとか、あるいは楚の名臣の屈原という人が、河に身を投じて死んだとき、その霊をなぐさめるための供物にささげたのがはじまりであるなどの伝説があります。

日本でも、すくなくとも平安時代には用いられ、節句の日に人に贈ったりしました。その中には、五色の糸などで飾った「かざりちまき」などもあったことが伊勢物語などに出ています。

「ちまき」の贈答にそえた和歌なども多く残っています。

「ちまき」は古くから行なわれたので、京都の方が中心だったようです。京都には川端道臺という古い由緒のあるちまき屋が今でもあります。

「柏餅」の方は江戸時代になってからのものらしく、小豆餅、味噌餅とも早くから作られたようです。

ある書物によれば、京や大阪では男の子の生まれた初の端午には「ちまき」を配り、二年目からは「柏餅」を配るが、江戸では初年から「柏餅」を配ることが書かれています。

遊びや、たべものに事欠かぬ現代は、いつてみれば年中が節句みたいなものかもしれません。しかもその中の節句はあまりにも商業主義に毒されているように思います。

あまりそれに振りまわされずに、それぞれの節句のもつ歴史的な意味を考えてみるのもよいのではないのでしょうか。

端午の節句にしても、いまに残る行事のはしはしから、容赦ない疫病の猛威の前に、無力な姿をさらしておののいた古代人の、すがりつくような祈りをくみとり、自然に對してあまりにも傲慢になった現代のわれわれの反省としたいように思います。

(吉川弘文館)